

学童期における自己の構成の発達

20 答法を用いた分析

Analysis on School-Age Children's Self-Construction Using Twenty Statements Test

富井奈菜実¹ 松島明日香² 竹内謙彰³ 荒木穂積³ 中村隆一³

Nanami Tomii¹ Asuka Matsushima² Yoshiaki Takeuchi³ Hozumi Araki³ Ryuichi Nakamura³

奈良教育大学¹ 滋賀大学² 立命館大学³

Nara University of Education¹ Shiga University² Ritsumeikan University³

Key words: School-Age, Self-Construction, Twenty statements Test

目的

学童期は学校教育を通じて系統的な学習がなされるようになり高次の認識が形成されるに至る時期であるとともに、自己に対する多面的で多層的な意識を形成するようになる時期でもある。本研究は、9、10歳頃の発達の節目とされる中学年頃に注目しつつ、学童期における自己に対する意識の発達の变化を明らかにすることを目的とする。多面的で多層的な自己に対する意識や態度を明らかにするために、本研究では20答法(星野, 1989)を採用した。20答法のようなオープンエンドの回答方式は、自己を位置づける社会的文脈を個人的文脈とともに知ることが出来る可能性が高いからである。

ここでは、特徴的なカテゴリーの出現が学年によってどのように異なるかについて分析した結果を報告する。

方法

(1)参加児 公立小学校に通う児童 206人(1年生 28人、2年生 30人、3年生 38人、4年生 39人、5年生 37人、6年生 34人)。

(2)調査期間 2019年7月下旬~9月上旬

(3)質問紙 A4紙。はじめに学年、性別、誕生月の欄を設け、当てはまるものを丸で囲めるようにした。次に「あなたのことについてかいてください」と教示(文)し、回答欄には①~⑳(1、2年生は①~⑩)までの番号を付して「わたしは、_____です。」の定型文を羅列した。なお、裏面には同時実施した「3つの願い」、「将来の夢」も記載されている。

(4)手続き 実施者は小学校教員(主にクラス担任)である。研究の目的、実施手順、倫理的配慮について学校長に説明し、学校長から教員に説明がなされ、教員が実施した。回答時間に制限は設けなかった。

結果

回答内容のカテゴリーを分類し、中学年頃の特徴を検討した。

(1)自己に対する意識(自己認識)

他学年に比べ4年生に多く出現するカテゴリーとして「人・人間」、「子ども」が示された(Tab.1)。「人・人間」もしくは「子ども」のいずれかを回答した(「人・人間

or 子ども)児童は半数近くであった(Tab.1)。4年生は自己を客観的に認識し、大分類としてとらえる傾向が顕著であることが示唆された。

(2)回答形式の特徴

自己認知の他に中学年頃の特徴がみられたものとして、「注釈」(“()”を使用し説明を付加したもの)を用いた回答があった(Tab.1)。3年生以降は、記号である“()”の使用法を理解して使用し、回答をより詳細に説明するようになることが示唆された。

Table 1 大分類/注釈の回答割合

学年 (人数)	人・人間	子ども	人・人間 or子ども	注釈
1年(28)	0.0% (0)	3.6% (1)	3.6% (1)	0.0% (0)
2年(30)	13.3% (4)	3.3% (1)	13.3% (4)	0.0% (0)
3年(38)	0.0% (0)	0.0% (0)	0.0% (0)	7.9% (3)
4年(39)	30.8% (12)	35.9% (14)	46.2% (18)	15.4% (6)
5年(37)	2.7% (1)	0.0% (0)	2.7% (1)	10.8% (4)
6年(34)	14.7% (5)	0.0% (0)	14.7% (5)	8.8% (3)

(人)

考察

4年生では、個人的な文脈だけでなく、客観的視点から自己をとらえる「自己客観視」(田中,1987)や、集団との関係で自己を規定するような「集団的自己」(同上)が育ってくるといえる。「注釈」においては、自身の記述が他者にどのように理解されるかを意識しているといえる。

大分類の記述は寺町(2007)によれば4年生から学年があがるにつれて増加することが示されたが、本研究においては4年生に顕著であった。これは9,10歳頃になると自己客観視や集団的自己の育ちを背景に、個人的な文脈から離れて、普遍的に自己を位置づけようとする傾向が特に強まることを示唆している。

参考文献

星野命(1989) 自叙伝法・二〇答法.星野命(編)性格心理学 6新講座 ケース研 個性の型態と展開.金子書房.

田中昌人(1987) 人間発達の理論.青木書店.

寺町美紀(2007) 児童期の自己理解の発達—20答法とインタビュー調査の分析を通して—.立命館大学大学院 応用人間科学研究科修士論文(未公開).

〇本研究はJSPS 科研費 19K03246 の助成を受けている。